

平成22年(2010年)1月19日
山口県病害虫防除所

- 1 病害虫名 キクわい化病
(病原ウイロイド:キクわい化ウイロイド (*Chrysanthemum stunt viroid* ; CSVd))
- 2 作物名 キク
- 3 特殊報の内容 新発生

4 発生経過

- (1) 発生確認月日: 平成21年11月24日
- (2) 発生地帯: 田布施町
- (3) 発生状況:

ア 田布施町の施設栽培のキクにおいて、わい化症状の株が多数発生した。症状からウイルス・ウイロイド病が疑われたため、独立行政法人農業・食品産業技術研究機構花き研究所に同定を依頼した結果、キクわい化ウイロイドが検出され、キクわい化病と診断された。

イ 本病は昭和52年に静岡県で初めて確認され、その後全国的に発生が拡大しているが、本県では初確認である。

5 本病の特徴

(1) 病徴

茎の節間が短縮して草丈が短くなる。葉は小型化し、葉縁が下方に巻き、わずかに淡緑化する。花は小型化し、色が淡くなる。開花が早まることがある。挿し穂は発根不良となる。病徴は高温期(25~30℃)に現れやすく、低温期には現れにくい。病徴の程度には品種間差があり、感染しても無病徴の品種も多い。



図 被害状況(中央は健全株、周辺は被害株)

(2) 伝染経路

主要な伝染源は無病徴株を含めた感染株で、摘蕾、切り花、台刈りなどの作業により接触伝染、汁液伝染をする。感染苗の生きた根の残さが混入した育苗用土に挿し木育苗した場合や植え付け時に感染苗と根部が、摩擦接触することによっても伝染する。虫媒伝染は報告されていない。

- (3) 宿主範囲
キク科植物

6 防除対策

- (1) 感染苗をほ場に持ち込まない。病徴の認められたほ場では、親株を更新する。
- (2) 発病の見られた株は速やかに抜き取る。
- (3) 無病徴であっても感染している可能性があるため、新しく導入した品種では取り扱いに注意する。
- (4) 汁液伝染を防ぐため、作業時には品種や畝が変わるごとにハサミを替えるか消毒をする。ハサミの消毒には、塩素系漂白剤の50%液に数秒間浸漬することが有効である。
- (5) 感染株の残さが混入した育苗土は使用しない。
- (6) 農薬による防除は不可能である。

○ ウイロイドとは

- ・ ウイルスよりも小さく、1本鎖RNAからなる病原体である。
- ・ ウイルスと違い、外皮タンパク質をもたない。熱や紫外線に対して比較的安定している。
- ・ ウイロイドに感染した植物は、わい化や退色など様々な症状が現れる。